

英語授業をデザインする： 学士課程英語授業実践事例 advanced Classの場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAGAO, Chikako メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4312

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



英語授業をデザインする —— 学士課程英語授業実践事例 —— Advanced Class の場合

国際英語学科教授 長尾知子^{ちかこ}

はじめに

大阪樟蔭女子大学では、全学共通の学士課程英語教育プログラムを実施している。レベル別、少人数（20名前後）、統一テキスト、Task-Based Language Teaching (TBLT) を旨とする。旧樟蔭女子短期大学英米語科の英語教育カリキュラムを母体にした統一プログラムが、最終的にキャンパス統合後の学士課程の英語教育に受け継がれている。2018年度以降は1回生向け必修科目として、2回生時は全学的に選択科目化した Communicative English と Comprehensive English が週1回ずつ開講される。学士課程英語教育プログラムでは、新学年開始前にアップデートした詳細なガイドラインを配信し、学士課程の英語新任教員主体のセミナーを開いている。

筆者は国際英語学科に所属しているが、大半は学士課程1回生向けの英語授業 Compre. Eng. A/B 及び2回生向けの C/D を担当している。旧短大の英語教育カリキュラム改革当初から、その後の改組によるダウンサイジングを経た英語教育プログラムにおいてもスタッフの一員として携わってきた。本稿では、これまでの筆者自身の実践事例を踏まえ、過去3年間に筆者が担当した Advanced Class 向けの授業を実践事例として取り上げる。レベル別8クラス中のトップクラスにおいて、統一プログラムの枠内で、いかに差異化をはかり英語授業をデザインしたか、いかに授業運営を効率化したか、その総括的報告である。

これまでの英語授業実践事例

TBLT は英語教育改革の中核をなすものとして、2005年度より関屋キャンパスの旧人間科学部で導入された。筆者自身による当時の実践事例は、大学英語教育学会授業学研究委員会編纂の『高等教育における英語授業の研究』（実践 ID3-14：長尾 2007）に収録されている。2007年度の JACET 全国大会

では、提案者として招かれ「授業学研究委員会特別企画―授業実践事例に学ぶ―」の演題で、タスク学習を通して英語授業を活性化させる手法を提示した。講演中に上映された事例研究書付録 DVD (Disk1-4) には、児童学科の学生自ら英語をコミュニケーションツールとして使う様子が映し出され、楽しく英語を学ぶという英語教育プログラムのモットーが会場の参加者に例示された。

TBLT による英語授業へのアプローチは、まもなく主要な英語教授法の一つとして有効性を示すことになった。大学英語教育学会創立 50 周年記念として編まれた「英語教育学体系」(全 13 巻) シリーズの第 11 巻『英語授業デザイン―学習空間づくりの教授法と実践―』において、筆者は第 13 章「タスク中心の指導法における授業実践事例」(長尾 2010) を担当執筆した。音声重視のアプローチを経て TBLT を導入した経緯を踏まえて、タスク中心のアプローチの意義について論じ、準拠したウィリスの学習モデルを提示した上で、日本人学習者への応用例として Compre. Eng. クラスの実践事例報告を行った。

Comprehensive English A/B Advanced Class の実践事例

1. 対象学生と共通テキストの位置づけ

学士課程英語教育プログラムでは、3 学部 (健康・児童・学芸) の新入生に対し、英検版のプレースメントテストによりレベル別クラス分けを行っている。Food Science 8 クラス、Child Science 8 クラス、学芸合同 (国際英語を除く) JLPS 6 クラスの編成である。JLPS の 1～6、FS・CS の 2～8 クラスの 1 回生は、Cambridge 版の *Four Corners 1* (CEFR A1 レベル) を、FS と CS の Class1 では、*FC2* (A2 レベル) を共通テキストとしている。後者は、その他クラスの学生が 2 回生時に使用するテキストであり、FS/CS 合同の 2 回生向けの Elective Advanced Class では、*FC3* (CEFR B1 レベル) を使用している。

共通テキストの *Four Corners* は、全 12Unit から成り、前半を春学期、後半を秋学期に使用する。各 Unit は ABCD の 4 セクション構成で、Communicative English 担当のネイティブ教員は会話中心セクションの B/D、Compre. Eng. 担当教員は語彙・文法中心の A/C をカバーすることになってい

る。

大学受験で難易度の高い英語に触れてきた FS と CS のトップクラスの学生たちにとって、1 レベル上の FC2 のテキストであれ、CEFR A2 といえば、基礎段階の初級言語使用者を対象とするレベルである。いわば偏差値の高い学生たちには、既習文法項目から成る易しすぎる教材であるのは明白だ。従来の学習モデルである PPP 型学習（Presentation で学習項目の説明、基本 Practice、応用のコミュニケーション活動等の Production）では、学生の英語学習の動機づけを喪失させかねない。今回の Advanced Class に特化した実践事例は、タスク学習の基本教材として難易度の低いテキストを活用しつつ、新たに導入した重層的なアプローチを組み入れた、英語授業のデザイン案である。

2. タスク学習の要件と英語授業デザイン

「タスク」と呼ぶ活動は「常に、コミュニケーションを行う目的を持って英語を使う活動であり、何らかの成果を導くために行われるもの」（ウィリス 2003 : 32）と定義されている。タスク中心のアプローチとは、学習者が英語を使って意味のあるやりとりができるよう、英語授業をレッスン毎にデザインすることが前提となる。PPP 型学習では、言語的側面の学習が先立ち、最終的に自由な英語使用へと導くが、ウィリスのタスク学習のモデルでは、「言語的側面の学習」は、分析・定着活動として最終段階で行う。「プレタスク（トピックや内容の紹介）」からスタートし、「タスクサイクル（タスク活動、準備、発表）」を中心に据えている。教師は「学習の推進役」を果たす。

Advanced Class では、A2 レベルの共通テキストを英語の基本素材として、B1 レベルの知識のある学習者をタスク活動に誘うサイクルを定着させるに至っている。授業準備としては、まず「本日のお題」となるテキストの「トピック」をめぐって、いかに「タスク活動」を行わせるかを念頭に、配布用の Worksheet（A4 用紙 1 枚）を作成した。タスクのタイプについては、現在の共通テキストの前身で Cambridge 版の *Interchange Intro*（1 回生向け）及び *Interchange 1*（2 回生向け）を使用した際に、独自に作成したものを 7 つに分類している（長尾 2010 : 149-50）。Worksheet の 4 セクション（Warm-up / Pre-task / Main Task / Report）の構成はそのままに、タスクコンテンツを改めた。TBLT は今も色褪せることなく、学習者が英語を使って独自の情報を

交換し、英語で自己表現するのを可能にしているが、過去3年間の実践事例では、Advanced Class 向けに導入したクラス運営のアプローチも功を奏している。

3. 英語クラスの形態と初回授業例

TBLT 導入当初より、筆者が担当する全授業で協同学習の態勢をとっている。小阪キャンパスのリニューアルに伴い、英語授業向けの教室に可動式の個人机と椅子が配備されるようになったことは、協同学習の効果を上げるのに一役買っている。筆者の英語クラスでは、授業開始前に教壇側に向けた個々の机と椅子を4名1チーム編成で、チーム毎にブロック化し、横並びの2名が、向き合う形で、正面の教壇に対して机を横向きに配置した。学生が正面のボードを見るときは、可動椅子を軽く回転させて全員が前を向くことも容易だ。Team work では4名が顔を突き合わせて取り組み、Pair work では向き合う者同士が Regular partner、チェンジ後は隣どうしの組み合わせで、多くの Main Task では総立ちで、新たな partner を求める。

初回の授業から全席指定の協同態勢を敷くために編み出した方法は、英語授業がタスク中心のアプローチであることを認識させるのに役立つ。さらに、first name ないし nickname を記した教壇上の座席指定表に欠席者メモを記入してゆくことで出欠管理を行い、欠席回の配布物をチームメンバーに託したり、事情を尋ねたりする態勢作りも兼ねている。

初回授業は最後に行う日本語での説明を除き、All English の雰囲気で行う。開口一番の挨拶のあと、Warm-up を兼ねた Pre-task として、担当者に対して1名ずつ、英語で1つ質問するという課題を与える。ホワイトボードに、平均人数で20名の場合、1ブロックが4つの机と椅子からなる、全5ブロックの配置図をピンアップしておく。トランプの特徴的なカード記号 (Ace, Seven, Jack, Queen, King) は春学期のチーム名称となる。ちなみに秋学期は総入れ替えとなる組み合わせで、チーム独自の名称をつけてもらい気分を盛り上げる。

Pre-task として、教員との QA と初対面の挨拶を済ませた者は、20枚のカードの中から抽選的に指定ブロックのカードを引き当ててゆく。全員がカードを手に入れると、ブロック内での席取りは自由として、大移動となる。チーム編成が整うと、4人の顔合わせということで、英語での挨拶を促し、その

間に初回の Worksheet を配布する。

Worksheet には、一連のタスクサイクルの見出しと記入欄、質問のヒントなどが記されている。Main Task では、チーム内で向かい合う者を regular partner として、interview 形式で情報交換する。Pre-task 段階での QA が参考になるのは言うまでもない。最後は Oral Report で締めくくる。二人ずつ壇上で、取捨選択した情報を元に自分のパートナーを交互にクラス全員に紹介する。開始前には“Hello, everyone!” のひと言、終了後には“That's all, thank you.” が欠かせないことを伝える。発表中は、聞き流すのではなく、司会者的に口を挟み、英語の間違いを正しつつ言い直すチャンスを与える。言語的側面の学習でもある。ミニプレゼンはタスクサイクルの「報告」の段階に相当する。Writing タスクにするか、スキット作成タスクなどで Oral Presentation にするかは、タスクコンテンツ次第となる。

Advanced Class でも、使用テキストと進度、オンライン HW (ELSAT)、Classroom Library (深緑色の樟蔭バッグ入り) を利用する Extensive Reading は、英語教育プログラムの共通項としている。それ以外では独自の授業スタイルを貫いている点について、初回授業の最後に日本語で詳しく説明する。春学期の授業予定と評価方法などを一覧表にした Schedule には、全 15 回の日程と各レッスンのトピック、Communicative English のクラスに合わせた ELSAT の進度予定、補助教材の配布予定などを明記している。次項で取り上げる Weekly Report のフォーム (1 頁 4 週分) は初回から配布する。2 回目以降に配布する補助教材とその他フォームは以下の通り。まず市販学習書を利用した英検 2 級の練習問題と解答解説を各 4 頁分両面コピーしたもの。例文付きの英検頻出語彙 40 項目分を A3 用紙に両面コピーしたもの。Eiken Report フォーム (1 頁 4 週分)、Book Report フォーム (3 冊分) である。学期末に、3 種のフォームを合冊した Portfolio として提出することになっている。

4. Warm-up セクションの意義と Weekly Report の導入

受講生は授業開始前に、チーム毎のブロック以外に設えたセットデスクから、self-service 方式で各種配布物を受け取り、Worksheet と Weekly Report を机上に並置して授業開始を待つ。セットデスクには、あらかじめ Extensive Reading 用の英文読み物を 30 冊ほどディスプレイしておく。授業の前半は

テキストを閉じたままで行う。英語で本日のトピックと Main Task の予定を伝えたあと、Worksheet の Warm-up セクションから始める。

Four Corners 各 Unit の A/C セクションは、Vocabulary を導入する練習問題となっている。トピックに関連したイラストや写真画像を語彙リストから選ぶマッチングタスクである。下位クラスでは妥当な導入となりうるが、Advanced Class では、安易すぎるエクササイズは意味をなさない。テキストの新出語彙は、最低習得ラインとの位置づけ（テストに出る範囲）と伝えてある。「本日のトピック」を知らされた受講生は、Worksheet の Warm-up セクションで、チーム対抗の brainstorming として、思いつく限りの語句を板書する。

例を挙げるなら、Warm-up セクションは、いわば Vocabulary building を担っており、Sports and exercise(FC2 Unit1-C) のトピックでは、テキストの3分類（play~, do~, 一語の動詞）に+アルファ表現として（go ~ing）を加えた4分類の見出しをつけた記入欄に、チーム内で相談しながら Worksheet に書き込んでいく。辞書機能に限ってスマホ検索を許可し、活発な brainstorming を促す。チームによってはスペルを気にせず思いついた語句を我先にボードに書きつける。自由に過去の知識や検索したデータを活用する方針で、学びの幅を広げることに意を尽くす。一段落すると、テキストの Vocabulary セクションの音声を読み、一項目ずつリスニングしながら基本語彙を確認する。テキストの語句と一致した場合は、赤色でマークし、ボード上に板書されたその他の語句についても吟味しつつ、基本動詞の用法について日本語で解説し、他の関連語句も青色で追記する。

Weekly Report は、週一授業の記録フォームであるが、記述の仕方には、最も個人差が表れる。板書を丸写しただけであったり、口頭での補足説明をチャート化してまとめたり、授業全体へのコメントを記入したり、学生個人の裁量に任せている。いずれにせよ、Warm-up の段階で多様な語彙表現に触れ、思い思いに Weekly Report を活用することで、限られた語彙・文法事項の習得を目指す下位クラスと異なる学びを提供している。

5. Pre-task セクションの役割と音声教材活用法

使用テキストの A/C セクションでは、Vocabulary の次に、トピックに関連した言説 Language in Context ないしモデル会話 Conversation、文法事項を含

む例文・語彙をまとめた Grammar が続き、あとは発音や応用のスピーキング課題が提示されている。順を追ってテキストの練習問題こなす授業では、従来の PPP 型学習に陥ってしまう。Advanced Class では、Pre-task の段階で、Warm-up 同様にリスニングと、文法事項解説（言語的側面の学習）を組み入れており、ウィリスのタスク学習モデルを日本人向けにアレンジした形となっている。多くの場合、Pre-task 1 ではリスニング中心の学習を、Pre-task 2 で Main Task の準備作業に当てている。

リスニング教材は通例、内容理解の QA か、あるいは空所補充の Dictation で使用されるが、特に QA 方式は単調なエクササイズにしかならず、学習効果を得られにくい。Pre-task 1 として扱う場合、チーム課題として、Language in Context ないし Conversation の内容をメモし、板書で発表するためのリスニング教材として活用している。比較級・最上級など多少難しい文型を扱う Unit では、Grammar セクションの例文を、穴埋め方式の Dictation で Pre-task Listening として加える場合もある。Worksheet 作成時に、言説や会話の内容をメモするスペースが割けない場合には、裏面にメモを取る指示を与える。ボードにチーム毎の記入スペースを設けておき、英語の Keyword でも日本語での状況説明でも記載方法は任せてボードに向かわせる。会話文を二三回回聞かせる度に thinking time と称する時間を設けている。テキストを閉じたままなので、リスニング作業には、質問文が用意された QA 方式にはないワクワク感が伴う。

確認作業として、一二行ずつ再度リスニングしながら、ボードに記されたキーワードやメモ書きと照らし合わせて修正しつつ、本日の文法事項を含む英文や、役立つ口語表現を板書、言語的側面について解説する。Weekly Report への書き込みが一番活発になる段階である。この後、ようやくテキストを開かせ、会話文をペア練習（Look-up and Say Technique を周知させている）、Grammar セクションの例文をシャドーイング読みで口均し練習した後、Worksheet に戻り、Main Task の準備に入る。テキストの文法問題は、言語的側面の確認作業として、授業の最後の 5 分を当てている。

6. Report セクションの意義と Tutoring の導入

前回の TBLT による実践事例（長尾 2010）では、Homework Sheet による個別対応の方策を提案したが、今回は Advanced Class 向けのアプローチと

して、それに代わる Tutoring 方式を新規導入した。Main Task の報告をする Report セクションでは、情報交換した内容を報告する基本路線は保ちつつ、「本日のお題」をめぐって自己表現ができる Writing task 的な側面を加味した。

以前は、添削した HW を次回クラスで返却、清書した Second draft を期末に Portfolio として提出させていた。この方式では、大半の学生が添削された箇所を吟味することなく、機械的に清書したものを提出するという、担当教員の骨折り損の結果になった。一人ずつミニ家庭教師をするというアイディアは、筆者独自の徒労改善策として生まれた。Report の課題例を挙げると、TV programs がトピックの回 (FC2 Unit 6-A) では、アンケート調査型の Main Task 後の Report で「テレビ番組について、自分の好き嫌いを踏まえて調査結果を報告し、コメントする」とのお題を用意した。

Tutoring の導入に伴い、授業後半の 30～40 分（終盤 5 分を除く）は、全面的に個別対応となる自主トレスタイルに切り替えた。時間のロスをなくすための方策として、整理券（トランプのカード利用）を用意した。セットデスクの配布物用スペースを Tutoring コーナーにし、整理券の番号で呼び出し、横並びデスクの左側に座らせる。記入済の Report を教材にした、いわば家庭教師タイムである。20 名を超えるクラスでは、赤ペン片手に個人指導するのも必死の作業となる。受講生は、自分の番号が呼ばれるのを待つ間や添削指導を受けた後は、各自のペースで英検問題と Extensive Reading に取り組む。Eiken Report には、本日の記録として、シートの左欄に、解答解説頁と照らし合わせて、正答率や間違い箇所の問題点を書き出し、右欄には英検頻出語彙リストから覚えておきたい例文などを書き写す。Book Report には、任意に選んだ一冊のタイトルなどを記録し、読了後は日本語で内容紹介の記事を書く。同一クラスを受け持つ Communicative English でも、Classroom Library が持ち込まれるので、同じ Book Report の作業を続けることができる。いずれにせよ他のクラスでは一斉に Reading に取り組む時間を設けている。

Report セクションの Writing 課題では、自己表現の幅が広がる。意欲的な学生からは、習った語彙表現を使いつつ、持てる英語の知識を総動員して言いたいことを伝えようという意気込みが伝わってくる。新学期当初は、無頓着だった英語の文法ルールを、個人差はあるものの、徐々に意識するようになる。数えられる（扱いの）名詞かどうか考え、動詞はどうするか、どんな前置詞にするかなど、それなりの英文を書くには、頭を働かせ必要があるこ

とを学びとってゆく。問題点を赤ペンでなぞり、まずは問いかけてから加筆修正してゆく。関係代名詞や仮定法などを半端に使った意味不明の作文に対しては、何が言いたかったのか確かめ、添削すると共に、易しい表現で同様の内容を伝える方法があることを伝える。Report には英語力の差が如実に現れるが、良い点を見つけて必ず評価するようにしている。学生側は、認識を新たにして驚いたり、悔しがったり、褒められて喜んだり、パーフェクトを目指したり、それぞれの思いを Report にぶつけている。

7. Special Lesson 及び Team Presentation と成績評価

統一プログラムでは、半期 15 回の授業を 3 つの Module に分け、Compre. Eng. のクラスでは、テキストの Unit が 2 つ終了する毎（授業 4 回分）に、次の授業で Review Quiz が行われる。FC の Workbook に準拠しており、基本語彙と文法の習得を授業目的にしたシステムである。Advanced Class では、テキスト関連の学習項目はオンライン HW で賄うことにしており、3 コマ分の授業時間をレベルに相応しい学習やテストに当てている。

具体的には、Special Lesson、Team Presentation、Review Test 枠として 3 コマを使っている。最後の授業枠で全 Unit の Review Test を行い、テキストの語彙文法に限っているが、すべて記述式にすることで、難易度を上げている。2 回目授業より配布している No1 から 10 までの英検語彙リストについては、7 回目に No.5 までの範囲で、後半部は最後の Review Test 時に Eiken Vocabulary Quiz を行う。A2 レベルのテキストからは見込めない語彙力アップの方策である。

2 枠目の授業コマは、Special Lesson に当てている。春は Unit 3 を終えた段階で、Listening Special と Pronunciation Special を行う。マザーグースの音声を使った手作りタスク教材で、強弱のリズムなど英語の音声の特徴に気づかせ、クイズ形式で英語の音韻体系に触れ、にわか仕込みの発音練習も行う。秋学期は Christmas Special と題した Worksheet を作成し、各種課題を用意している。さらに Christmas Bingo（英語の QA タイプ）を楽しんだ後は、スライド画面で三択の Christmas Quiz にチーム対抗で取り組み、欧米の文化に思いを馳せてもらう。

最後から 2 回目の授業中に Team Presentation を行うのは、TBLT 導入当初からの習わしである。それまでに Main Task でスキット作成タイプのタスク

を行う際、Report に代えてミニプレゼンを二三回行っている。ペアかチーム毎に、教室の一角に集まって担当者の前で実演させる。終了後に言語的側面と声や演技など見せ方にも注意を促し、最後の Team Presentation の予行演習の意味合いをもたせている。

テキストの学習を終える 12 回目の授業時に、残る 3 回の授業内容をまとめた予定表を配布する。チームプレゼン要綱を中心として、筆記テストの要項、Portfolio の提出法、オンライン HW のメソッドなどを明記してある。プレゼン要綱には、各 Unit のトピックから考えうるシチュエーション案と、Key phrases をリストアップしている。途方に暮れるチームが出ないための足場作りだが、授業中に習った語彙・表現を採り入れてさえいれば、プレゼンの形式や内容は自由に行っている。授業の後半は、プレゼン準備の時間に当てる。プレゼン当日の前半はリハーサル、立ち稽古を必須に行っている。チーム毎の Application form と、各自がプレゼン後記入する Self-evaluation シートを配布、Entry No. をジャンケンで選ばせ、板書してプログラムとする。当日欠席者が出た場合は、代役として該当チームのリハーサルに加わる。本番では show time さながら、プレゼンの時間を楽しい学びの集大成に行っている。Self-evaluation シートの多くには、反省や自画自賛、他チームへの賛辞に加え、「楽しかった」のひと言が添えられている。

授業の評価方法については、初回に配布する Schedule に明記している。Advanced Class では、上述したように、英語授業をデザインするに当たり、多角的な評価項目を採り入れた。コツコツ独自に取り組みさえすれば成績に反映される仕組みとなっている。評価の内訳は以下の通り。

- ①出席&授業中の活動 20%
 - ② Team Presentation 10%
 - ③ Vocabulary Quiz 2 回 10%
 - ④ Review Test 20%
 - ⑤ Portfolio 30% (Weekly Report / Eiken R. / Book R. 各 10%)
 - ⑥ ELSAT 10%
- 付記：秋学期は（①～⑥合計）の 85% に、全学共通の実力テスト成績を 15% 分加える。

おわりに

大学英語教育においては、中高の英語授業のように新出語彙・文法の学習に縛られることがないため、使用テキストや指導法に選択の余地がある。大学側の要請で、TOEIC 対策に特化した英語教育プログラムを実施する大学

も増えているが、必修科目として、大勢の英語非常勤講師を擁する大半の大学では、対象学生のレベルにかかわらず、大枠の指定はあれ、担当者の好みで教材を選び、PPP型であれ何であれ、任意の指導法を容認しているようだ。一例として筆者は、非常勤先の文学部授業で、JACET第2次授業学特別委員会が「学習者の自立性を高めるリメディアル教育」の括りで募った際に、タスク学習の要素を採り入れた実践事例案「F23 英語力に自信のない学生の言語感覚を活性化させる授業—多人数対応クラスの協同学習の試み—」（長尾 2012）を示した。

大阪樟蔭女子大学の学士課程英語教育プログラムでは、あえて難易度の低いテキストを共通テキストに選定することで、下位レベルの学生も無理なく、英語でコミュニケーションを楽しみ、リメディアル的に英語の基礎力を身につけるのをコンセプトにしている。本稿では、ウィリスによるタスク学習モデルに準拠しつつ、上位クラスに対応した英語授業デザインのあり方を提示した。

筆者は、2005年度のTBLT導入以降、試行錯誤しつつ、いずれの英語クラスでもタスク学習のアプローチを採用している。国際英語学科3回生向けの選択必修科目『観光ビジネス英語』においては、毎回のスキット作成型タスクでミニプレゼンを行っている。そして最後のTeam Presentationを集大成として、受講生は、エアラインやホテル、旅先での場面を再現するという英語運用を通して、「自分の中に息づく my English を育てる」（田中 2016）学習を実践している。

引用文献

- Council of Europe, Modern Languages Division. (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. 24.
- 田中茂範(2016)『英語を使いこなすための実践的学習法 my English のすすめ』大修館書店、iv.
- ウィリス, J. (著), 青木昭六 (監訳) (2003) 『タスクが開く新しい英語教育』開隆堂、32. 82-104.
- 長尾知子 (2007) 「Comprehensive English Task-Based Learning (タスク学習)」大学英語教育学会授業学研究委員会 (編著) 『高等教育における英語授業の研究—英語実践事例を中心に』松柏社、124-25, 328.

- (2010) 「タスク中心の指導法における授業実践例」 大学英語学会 (監修) 『英語教育学体系第 11 巻 英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』 大修館書店。142-60.
- (2012) 「F23 英語力に自信のない学生の言語感覚を活性化させる授業 — 多人数対応クラスの協同学習の試み —」 JACET 第 2 次授業学研究特別委員会編 『高等教育における英語授業の研究 学習者の自律性を高めるリメディアル教育』 139-40.
- Richard, A.C. & Bohlke, D. (2005) *Intercharge Intero, IC, 1*. Cambridge: CUP.
- (2012) *Four Corners 1, 2, 3*. Cambridge: CUP.